

海
を
渡
る

渡
辺
美
知
夫

海を渡る

渡辺美知夫

五里霧中の心境のまま、一年無理な留年までした私には、卒業後どうなるかなど、まるで見当がつかなかった。

「少年よ、大志を抱け」という有名な文句に対して、「とても大志なんか抱いてる処じゃないよ」と、力んでではなく、詮方なく、思わせられていた私に、ズッシリとのし掛かっていたのは、父母を養わなければならぬという意識であった。女房は離縁できても、親は離縁できない、という思いであった。親を兎も角も養うためには、冒険はできない、私はそう思い、英文科を卒業するからには、英語教師の途しかなく、どこか田舎の中学にでも口が見付からないものかと、徹底的に弱気であった。

順当に行けば卒業する筈の昭和七年も過ぎた翌八年（一九三三年）の二月の初め、当時の英文科の主任教授であったI先生から、先生の演習が終ったあと、

「ちょっと来い」と呼びとめられた。何か失態をして、お叱りを受けるのかと、恐る恐る先生の研究室に罷り出ると、

「キミ、旅順へ行きなさい」と、いきなりの命令である。私はキョトンとした。

「旅順で何処ですか」と、私は訊いた。旅順といえば、日露戦争で激戦のあったところとは聞いていたが、自分と縁がなさろうとは、夢にも思っていなかった。私には予備知識がまるでなかった。先生は苦笑されながら

「旅順に工科大学があつて、それに高等学校にあたる予科というのが併設されている。そこへ英語教師一名派遣してくれ、という話が来ている。だからそこへ行くんのだ。」

当時主任教授の命令は絶対であった。私は「ハイ」と答えるより外なかった。

先生は旅順が遼東半島のチョッ鼻にあつて「そこは今、関東州という名の日本の植民地の一部である。英語名は Port Arthur と「うのだ」と教えて下さつたが、何故旅順が Port Arthur なのか、尋ねる氣力が私にはなかつた。今もつてその正当な理由を心得ているわけではないが、多分イギリスのビクトリア女王の、数ある子供達のうちの一人のことだろうと思つている。こういう命令を受けて、私の思い当つたことは、前年の秋ごろから、先生の演習で私が度々指名されて、発音を直されたりしていたことであつた。テストされていたのだ。

「これはエライことになつた」と私は思つたが、昨十二月の二十四日、やつとの思いで提出した卒業論文が、兎に角パスしたらしいと察せられたのは救いであつた。そして当時すでに始まつていた満州事變のため、物情騒然、不景氣のドン底にあつた日本の国情の中で、兎も角も就職口を与えられたことに、眞底ホツとする思いであつた。「狭い日本にゃ住み飽きた」という、当時流行していた俗謡を、私も口ずさみたい氣になつた。その一方、満州は今戦場なのだから、ひよつとしたら大砲の音が、遠雷のように聞こえるかも、という氣も

した。

卒業に必要な単位は、かなり余分に取つてあり、教員免許に必要な課目も、どうやら揃つていたので心配なかつたが、最後の難関の「口述試験」が氣になつた。今迄の数多い試験は、受験者が多数で、試験する側は一人だが、口述試験は試験する側が複数で、受験生は只一人、孤立無援ということになる。氣弱な私にはそれが何とも氣掛かりだつた。

その年度には私同様留年した者が多くて、中には除籍寸前という豪の者もいて、なんと総勢四十二名もいたのだが、(当時英吉利文学科の定員は、たしか二十五名位だつた)それが一纏めに控室に集められて、呼び出しを待つことになり、やがてお昼どきになつたので、助手の堂々たる体格の S さんが、カレライスを奢つて下さつたのを、今もつて感銘深く想い出す。

試験は I、S 両先生の外 William Empson というイギリスの詩人もいて、この詩人が私のタイプで八十八頁に及ぶ「論文」に何彼と文句を付けたが、万事おとなしく承り置くことにして、反論など一切せず、只管無事故免を願う策をとつた。I 先生には *opiate* とはどういうことかと聞かれて、閉口したので覚えてい

が、私が直接師事したS先生には、何を云われたか全く記憶がない。E先生に委かせておられたのかもしれない。とにかく「無罪放免」になってホッとした。

ところで私の卒業論文は、何とも手間ひまが掛かった上に、金もかかった。中味がお粗末なのだから、せめてスラスラと読んで貰えるようにと、当時英文で書くこと以外、別に何の規定もなかったのに、私は自筆のままは提出しないで、全部タイプに打って貰った。

一枚につき一円、つまり八十八枚で八十八円、それにビプリオグラフィ、タイトルページ、見返し、表紙など、総計壹百円を支払うことになったのは、予想外であった。

それに気が付いてみると、私は同輩たちより長逗留していたのに、安田講堂という、あの有名な建物に、今迄一度も足を踏み入れたことがなかったのだ。この際卒業式に是非列席して、あのチョコレート色の建物の内部を見物しないと、そんな機会は二度と来ないだろうと思った。ところが事務室からの知らせで、旅順からは四月一日に着任するようというお達しが来ているというのだ。当時の交通手段では、卒業式に出ては、四月一日に間に合わないということが判った。

そこで私は三月一日にそこで大学記念日の式典があることを知って、その日に出席することで、所期の目的は果すことにした。講堂正面の壁画がピンク色で、思いの外に艶めかしいのにビックリした。その上当時のO総長が壇上で、教育勅語の巻物を、片端を持ってサツと縦にほどいたのを見て息を呑み、流石は帝国大学だなど、妙な処で感じ入ったのが、今も忘れられない。教育勅語というものは、小学校以来、校長先生がモーニングに白手袋姿で、いとも恭々しく取扱われるのを、見慣れていたものだからである。

関西の郷里に帰った私は、やっと卒業できたことを、家族に報告した上、旅順工科大学予科に就職することになったと告げた。父は何も云わなかったが、母は不賛成であった。

「旅順やなんて、そら外国やないか」と言つて泣いた。卒業の上は、私と漸くまた同居できる筈と、楽しみにしていたらしい。私は「旅順は外国やない。今は日本の植民地や」と、聞いて間もない知識を披露したが、両親何れも「月給なんぼや」とは訊かなかった。訊かれても、実は私には答えようがなかった。何も知らなかったからである。それ以来これが私の癖になつ

た。私はこの齢まで、いくつもの学校のお世話になって来たが、着任当日月給の額が判っていたことは、一度もない。実は私には忘れようもない経験があるのだ。どういうことだったか、前後の事情はもう覚えていないのだが、学生時代、ある教育系の大学の卒業見込の男が、就職の交渉をしているところに、偶々通りかかる羽目になったのだ。その男が係りの人物に「もう一声、もう五円」と、月給の値上げを懇願しているのが耳に入った。私はこういうセリフは、自分は決して口にしまいと、咄嗟に決心した。その決意が尾を引いて、私は赴任先の学校で、一ヶ月働いて、会計課で月給袋を受取るまでは、自分の月給がいくらなのか、全く知らないという癖がついた。自分の受取る報酬の額は、自分の知ったことではないと、今以て私は思っている。今でういうボランティア精神で一貫できたと、自惚れている。

さて、鹿島立ちともなると、それ相当の装束が要る。東京の止宿先のおばさんに勧められていたテーラーに、三つ揃いを一揃い仕立てて貰うことになった。式服兼用のつもりで、ズボンは縞にし、上衣はモーニング地の黒にしてくれと頼んだ。旅順は寒いところだとい

ので、大外套もついでに頼んだら、これが又大金を請求されることになった。貧書生の癖にと今も思うのだが、頼んだものは仕方がなかった。

指定通り四月一日に旅順に着任するためには、当日の朝大連港に着いている必要がある。当時大連航路は大阪商船の受持ちであった。始発の神戸港を正午に出航、瀬戸内海を航行して、翌朝門司に着き、あらためて其処を正午に舟出して、玄海灘で一夜を明かし、翌朝大連に入港するという手筈であった。そういえば後年「満州開発」が益々盛んになった頃、船会社側が気を利かせた積りで、大連航路の日程を短縮しては、というアンケートを出した処、陸の上では目の廻る思いをしているのだから、せめて海の上ではゆっくりさせてくれという回答が圧倒的だったと聞いた。舟旅は海が荒れない限り、たしかに快適な、たっぶり心身の余裕のあるものだったと私も思う。

神戸港を出帆するとき、家族の見送りは当然として、K学園時代にお世話になった漢文のO先生がお顔を見せて下さったのには驚き、且恐縮した。思いがけないことであった。この先生に教室で何を教わったかはもう覚えがないが、何かの折に「キミは漱石はもう読ん

でるらしいが、鷗外をもっと読みなさい。」と勧めた。鷗外は日常見慣れない漢字を沢山使う作家だなあ、とは思ひ、漢文の先生らしい忠告だとは思つたが、中夕・セクスアリスという作品もあるよ、と勧めた。下さつたのは意外であつた。当時その作品を私は名前さえ知らなかつた。今読み返してみると、冒頭の哲学及び哲学者に関する数パラグラフに格別の共感を覚える。暗黙の影響かどうかは判らないが、あれから数十年後、私はT女子大を、これを職歴の最後と思つて退職したが、その記念にと買ひ込んだ幾種類かの全集の中に、トルストイやドストエフスキーなどに混つて、ショーペンハウエルの全集も含まれている。

さて、船は汽車や電車と違つて、急速にスピードを上げることが出来ないから、波止場で見送る人達との間に張られた紙テープが切れるまでに、随分ひまが要つた。私は二等船客であつた。むかし、高校二年のとき、生まれて初めてお江戸見物に出掛け、当時一高の校長をしていた大叔父を湘南に訪ねて、十日ほど居候をしたとき、ある朝一緒に東京に出ようとしたら、鎌倉の駅で大叔父はサッサと二等車に行つて仕舞ひ、自分は三等車に乗り込んだことが、そのとき何故とな

く想ひ出された。

瀬戸内を縦断する船旅も、当然そのときが最初だつた筈なのに、船上から眺めた祖国の風物は、慣れ親しんだ景色のせいとか、格別の思いが残つていない。心を衝たれたのは翌日通りかかった朝鮮半島南端の「多島海」の風物である。南方に茫々たる海面が広がつてゐるのに、どうしてワザワザこんなに多くの小島が点々とする、複雑な水路を拵ぶのかという不審の念の上に、朝鮮の風土が日本のそれとは違つて、一荒涼としていて、植物も背の低い松らしいもの位しか見当たらないのに、ひどく侘びしさを感ぜさせられた。

むかし、大人たちが、沖釣りを楽しもうとする小舟に、子供の自分も乗せられて沖に出たが、上天気で海面もゆるやかなうねりがあるだけという好条件の中で、錨を降ろした大人たちがお目当ての釣りを楽しんでゐる間、自分だけ何もせずじつにいたせいか、小舟がうねりに乗つて上下するうちに、したたかに舟酔いを起こして、ひどく苦しい思いをした経験がある。この船旅にも、かねて玄海灘は荒海だと聞かされていたのも手伝つて、内心緊張していたのだが、その玄海灘も、名の通り海の色が見慣れた瀬戸内の海より、格段に濃い

いなと感じ入る余裕を失わず、多島海も黄海も、幸い船足はいとも順調であった。緊張していると酔わないのかも知れない。その証拠に、後年任地から故郷に帰省するときは、ギリギリまで試験の採点などして草臥くたびれている上に、やれやれ今学期も無事に終ることができたという安堵感で気が弛んでいると、海が格別荒れていなくても酔ったものだが、休暇が終って任地に向かうときには、少々海が荒れても平気で、襲いかかる波頭を打眺めてさえいられたものである。

大連港も上天気、雲一つない快晴であった。これがこちらの常態なのだ、後で知った。ここでも下船までに、かなり時間があった。船内に乗込んで来た係官たちが、いろんな検査をするのに手間取るためらかった。暇潰しに上甲板に出て、手摺りの上から埠頭を見降ろすと、倉庫らしい建物にもたれかかるようにして、中国人の、所謂「苦力」といわれる労働者たちが、揃って青い便服を着て、ズラリと並んでこちらを見上げてゐる。私は何故かハッと息を呑んだが、数分後汽車の汽笛の鋭い音がして、その苦力たちが一斉にその音のする方角へ、ドッと駆け出した。私は群衆の迫力といったものを感じて、背筋を冷たいものが走っ

た。附近の線路で人身事故があったらしかった。

旅順からは事務官が出迎えに来てくれていて、大連駅までマーチョという馬車で行った。マーチョにはこれから度々お世話になることになる。中国人が御者の二輪馬車で、格安の短距離交通手段であった。満鉄の旅順線というのに乗り込んだが、事務官はワザと中国人用の三等車を二輛通り抜ける手段をとった。マーチョといい、三等車といい、何れも新米の私に中国の臭いを嗅がせようという、「新兵教育」の一環なのであった。強烈なニンニクの臭いがした。大陸にきたんだな、という実感が湧いた。

二等車はガラガラに空いていた。やがて汽車は黙ったまま走り出した。こちらの鉄道は広軌なのだそうで、何となくユツタリして良い気持であった。大連の街を出はざれると、一面の畑になった。日本内地より遙かに乾いた感じの粘土色が抜がった。四月一日といえは満州はまだ冬なので、畑の麦らしい緑も背丈が低かった。すると突然その畝の間を、眞白な兎が、線路と直角に、一目散に逃げて行くのが見えた。日本ではもう滅多に見られない風景だなと感動した。暫くするとカラランカラんと、のんびりした鐘の音が聞こえて来た。

列車が駅に入る前に、必ず鐘を鳴らすのだそうだ。これも何となく朗らかで、悠長な気分であった。アメリカの西部劇などを連想した。列車が駅に止まると、便服の青にまじって、若い娘が鮮やかな桃色の服を着て立っている。麦の緑といい、娘さんの明るい桃色といい、すべてが原色で、日本内地の中間色と際立って違うなあと感じ入った。

一時間余りで旅順に着いたが、到着前に車掌さんが切符を集めに来たのも、珍らしかった。駅には改札口というものが無いのだそうだ。駅は閑散としていた。

駅前広場に出ると、紺碧の空のもと、斜向いに、高さ十メートルほどもある、蘆葦こむかぶの小山が見えた。あれは何だと訊いたら、塩の山だという。日本内地でこんなことをしたら、塩は忽ち溶けて流れてしまうだろうと思った。踏切を渡って、大学に向う広い通りに出た。道幅は三十米はあった。両脇に街路樹が整然と並んでいるが、完全に枯木姿である。ニセアカシヤの並木で、芽ぶくのは来月になるということであった。広い通りに人影は一つも見えなかった。既に盛んな緑に溢れていた故郷を想い、遙けくも来つものかなの感慨があった。

大学に着いてみると、大学本部のある建物は、南北に細長い二階建てで、見るからに日本人の手に成ったものではなかった。ロシアの海兵隊の宿舎であったと云うが、白亜と朱色の、配合の巧みなデザインで、ガツシリとした石造りでありながら、屋根の軒先に細い鉄製の裝飾がめぐらされていて、それが繊細な、女性的な感じがして、美しいなと思った。その建物の南端に正門があって、それを距てて建っていた三階建の、こちらは日本製の白い建物が、予科の教室であり、事務室であった。正門の前の大通りを南へ渡ると、そこに又門があって、その構内にはドッシリとした、赤煉瓦の建物が数棟建っているようであったが、それが学生寮であって、「興亜寮」ということであった。

教務や事務の打合わせが一通り済んだあと、これからの棲家になる宿舎に案内された。大学の東北方、日本人の住宅区域になっている「新市街」と総称される街区の北の端で、海岸からゆるやかな上り坂になっている道を登りつめた処に、ロシア建の石造住宅があった。吾妻町と呼ばれる一廓であった。両側から七、八段登れるようになった階段を上った処に東西に延びる、平家建てであった。南側に三部屋並んでいたが、そこ

は既に「前任者」が入っていた。私に割当てられたのは狭い廊下を隔てた、北側の細長い部屋であった。その年の新任者のうち、私が最後の着任者だったらしい。これは全くの憶測であるが、当時の学長の頭には御時勢が強く意識されていて、御自身の趣味と時勢が一致する、漢字が専門のTさんが真先に、次は地質学のSさん、三番目が枢軸国のドイツ語のMさん、最後が英語の私ということになったらしい。御当人はそんな気毛頭なかつたと仰言るおっしゃるだろうが、その後の経過を考えると、私にはどうもそういう憶測が当たっている気がするのである。私は米英の鬼畜語が「専門」だったのだ。私のたった一日前に着任した、ドイツ語のMさんは間もなく「任官」したが、一日遅れた私が任官したのはそれから七年経った後だった。しかも任官したら月給が下った。どうしてそういうことになったかと云うと、任官前の「教務嘱託」という身分には、「植民地手当」というのが六割ついたが、任官するとそれが四割に下ったためということらしかつた。それはそれとして私は、赴任して最初に受取った月給が百七十五圓だか六圓だったのに吃驚した。日本内地では当時中学校教師の初任給が、七十圓ぐらいと聞いていたので、

これは百圓多過ぎると思った。「有難い、これでゆつくり父母が養える」と、私は正直ホッとしたことであつた。生まれて初めて財布の中味に余裕ができた。私は金壺圓を拂って殆んど日曜ごとに乗合バスで大連の街に出て、映画を見たり、書店をひやかしたりして、帰りは内田洋行とかいう洋品店で、皮の手袋を買ったり、ボルサリーノとかいうイタリー製のソフト帽を買ったりした。それが忽ち学生達の評判になったことを、後で知った。ところがその後暫くして、私が数少ない友の一人と頼んでいたY君から電報が来た。五十圓送れというのである。電報だから何故そんな金額が必要なのかは判らない。電報を寄越すぐらいだから、事は急を要するのだろうと私は思い、お申越しの通り送金したが、その後借借証も何も届かなかつた。私は人助けをしたのだと自分を納得させた。この友はその後数年の後、娘さんが私の当時在職していた東京の女子大に合格したについて、寄宿舎に入れるよう取計らってくれと言いに来た。彼は九州に住んでいたの、遠隔地の人は当然入寮の資格がある筈なので、私が動く必要も余地もないことを説明して、断わつた。其後は入学したとも入寮したとも何の通知もなく、卒業する時

もその後も、私はその娘さんの顔を遂に見たことがない。友達の中にはこういうのも居るのだと、その後の複数の別件をも加えて、私は観念した。貸した本と借りられた金は、戻らぬものと私は思うことにしている。

昭和八年に新規採用者が多かったのには、ワケがあつた。なんでも前年に恩給法が改正になって、熟年の先生方は七年度末に退職なさる方が有利ということになったらしい。その結果予科の先生方もすっかり若返ることになったようで、その一人が私であつたという訳である。TさんもMさんも同じ仲間ということになる。私は同じヨーロッパ語の教師のMさんと、その後長いこと親しく付き合うことになるのだが、二人共戦時下の工科の学校の雰囲気、何となく馴染み切れなくて、学生に言わせると、「超然として」暮らした。Mさんは折にふれ私の宅に来て、一緒に「蓄音器」後には「電蓄」でクラシック音楽に聴き惚れたり、文学談に時を忘れたりした。Mさんは後に白系ロシア人のところに下宿して、ロシア語をマスターし、愈々超然ぶりを徹底させることになったが、彼と違つて「俗物」の私はそうは行かなかつた。その経緯については、いずれ後に語る折もあるであろう。

旅順の風光は当然日本内地とは違つている。半島の突端に老鉄山という、六甲山を小ぶりにした様な山がある以外は、なだらかで平坦な線を描く、視野を遮るものとならない風景が広がる。小さく纏まつた景色をよしとする内地では、滅多に見られない佇まいである。私はその何の変哲もないところが気に入つた。流石に大陸は風光も大味で、のびやかだと思つた。もう一つ私の心を衝つたことがある。旅順から満鉄線を北上して、ハルビンでシベリヤ鉄道に乗換えて西に向い、ドイツの首都ベルリンに到る日時と、東進して北海道の網走に至る日時が、ほぼ同じだということに気付いたことである。私は気が大きくなつた。困境というもの私の心底から消えて行く気がした。生まれて初めて地球全体を見渡した気になつた。

こういう気分の中で、授業が始まつた。教科書出版の会社から出ているテキストのうちから、これと思つたものを選んで、教室で読解するという、当時行なわれていたやり方を、私も踏襲した。私は出発前に湘南の大叔父からアドバイスを受けていた。一つは教材について準備、つまり下調べを徹底的にすること、もう一つは教室内の取締りである。大叔父が言うには、クラ

スには必ず一人二人はヤンチャ坊主がいる。彼等は大抵一番うしろの席に陣取って、事を起こす機会を狙っている。教壇にたつたら逸早く、それらしい学生の見当をつけて、終始その素振りを監視し、不遜な挙動があったら即刻対応して、つけ入る隙を与えないこと、と云うのである。私はその双方を実行しようと思った。「あの頃の先生は、矢でも鉄砲でも持つて来いという顔付きで、教室に入つて来ましたよ」と、後に卒業生から冷かされた。もう一方のヤンチャ坊主の方も、私は早速一人の屈強な体格の男に目をつけて、始終睨みつけていたが、あとで彼が柔道の猛者で、歳が私と僅か一つしか違わないことが判明した。当時私は数えて二十五歳であった。しかもこの男は極めて温厚な人柄の持主であることも判ってきた。私の仕合わせな見当違いであった。名をYと言ったが、学部は採鉱学科に進み、卒業後撫順炭鉱に勤めた。私たちはそれ切り相会う機会がなくなつたわけだが、終戦後日本人と中国人の立場が逆転して、彼も坑道に降りて採炭する境遇になつたのだそうだが、そのある日落盤事故が起こつて、彼もその下敷になり、背骨を傷つけてしまい、その結果両脚を切断する始末となつた。その彼を支えた

のが彼の若妻である。彼女は旅順工大の物理学科の主任教授の一人娘で、私の家族も暫らく筋向いに住んだことがあり、日常の見聞から、これはまあマシマロのようなお嬢さんだなどと思わせられることが幾度かあった。深窓の令嬢であつた。その人がY君と結婚することになつたと聞いて、実は私は二人の前途を秘かに危ぶんだものであつた。ところが負傷後のY君を、文字通り支えた健気な彼女^{けなげ}は、むかしの私のイメーシとは打つて變つて、逞しい女丈夫になつていた。ここでも私は見事に見当違いをしたことになる。其後二人はY君の郷里の飯坂とやりに引揚げ、奥さんは毎朝Y君の仕事机の前の椅子へ、胴体だけの夫君をだき抱えて運び続けていると、風の便りに聞いている。

大分話がそれだが、実はこれが私の「特技」なのである。教室でもテキストのフトした記述に触発されて、ともすれば脱線する。私自身はそれを何とも申訳なく思うのだが、聞いている方はむしろそちらの方が面白かつたらしい。この癖は今も続いていて、ボケ防止に役立つと思つている。いい気なものである。

そのうちにクラスの何人かが私宅にやつて来るようになった。放課後來て居坐るわけなので、そのうちに

日が暮れてくる。私は赴任後一年経って結婚したがそれから後はこの傾向に輪が加かるようになった。妻はほうって置くわけに行かぬと、食事の支度をする。学生達はやがてそれをも目当てにするようになったようだ。九割以上が九州や中国地方を故里にする連中なので、こちらもつい同情したし、ことに冬休みは短かくて帰省してるヒマがないと、居坐る者が大多数であった。お蔭で妻は料理の腕が上ったということになるらしい。(私が長生きしているのはその賜物だというのが、現在のわが家の女性客の定まり文句になっている。)暫らくたって気が付いたが、学生達は月の半ば以後に数がふえた。どうしてだと訊いたら、学生達はそんなことも判らんのかという顔をした。月の後半は仕送りの金が乏しくなるからに決まるとるがな、というのが、抜け抜けとした返答であった。そのうちに山から取って来たというシメジを、ドサツと玄關の式台におろして、これでお願いますと注文する奴も出て来るようになり、一風呂浴びて一杯やって食事のあととはトランプやいろんな遊び道具で楽しんだりするようになった。あしたになってお開きという日もふえた。私しがきびしく禁じた遊びが一つある。麻雀である。こ

れは四人集らないと成り立たないし、始めたが最後夜が明けることは覚悟しなければならぬと聞いていたからである。そのうちに学長が機嫌を損じているという噂が伝わった。「徒党を組んでる」ということだそう。私は別に政治運動をやってる訳ではなし、授業の方も手を抜いたりはしている積りはなかったたので、取合わないことにした。そうした中で私の思ったことは、「人間食わせておけば温和おとなしい。これが政治の要諦だろうな」ということであつた。

こういふ付き合ひの中で、談論の相手として私の格別手応えを感じた学生が何人かいた。数学の得意なN君、社会的関心の強いK君、中でも地質学を志していた詩人肌のY君は、私がとても叶わないなと思つ程の格調高い和歌を作つた。彼は終戦後、奉天の自宅で結核のため亡くなつた。今も折りにふれ思い出すのは物理を専攻していたZ君である。彼は大連生まれで、満州の動植物にも強い関心を持つていた。ある日の黄昏なごれどき、その日の勤めを終えて家路についた私は、通い慣れた小径を歩いてゐた。するとすぐ足元を鮮やかな朱色の蛇が、一方の叢くさむらから、径を横切つて反対側の叢へ、ゆつくりと横切つて行くではないか。私は自分の

眼を疑った。夢かと思つた。疲れた自分の幻覚のよう
な気がした。家に帰ると丁度Z君が来合せていて、
私はそのことを話した。彼は苦笑して、「満州にはそう
いう蛇もいるんです。マンシュウヤマカガシと云いま
す」と、学名まで教えてくれた。前記の人達と共に、
彼もまた今は故人である。

図書館主任のUさんとは、赴任後間もなく知り合つ
た。教師は書庫にも自由に入入りできることを彼は教
えてくれた。早速お庫に入つてみた。工科の単科大学
なので、文科系の図書は格別珍しいものもなかつたが、
只一つ意外に思つたのは、Mark Rutherfordの作品が
十冊ほど書架に並んでいたことである。これは本名を
William Hale Whiteと云つて、一九一三年八十二才
で亡くなった、異色の人物で、私はS先生の英文学史
の講義を聞いて、名前だけは心に残っていたが、作品
に實際に触れたことは、それまで無かつた。それが今
眼の前に並んでいる。私は早速手にとつて見た。相当
古びた状態であつたが、なんとページが切つてない。
私は即刻借り出して読み始めた。清潔で誠実な人柄が
感じられた。難を云えばイギリス文学特有の *humour*
に欠けているが、文章は簡潔、的確で、自分の書く英

文の手本にもなるなと思つた。非国教徒の家庭に育つ
たという生い立ちにも、共感を覚えた。私は図書館と
いうものが大の苦手である。図書館の本には書き入れ
や線引きができない。そこでこの場合も Rutherford
の全作品を自分の書架に加えることにした。このとき
私は初めて郵便局で為替を組んで、イギリス本国から
直接取寄せる方法を覚えた。日本内地の本屋を介する
より遙かに安くつくのに驚いた。この経験の結果が教
科書版 *Atonement and Other Stories* である。昭和十
五年三月開隆堂という書店に出して貰つたが、これは
後に昭和三十二年十一月研究社の「小英双書」に加
わつた。Rutherford のものは昭和三十六年十一月に
Miriam's Schooling を出しているが、これは大した反
響がなかつたようだ。この外にも私は数点教科書版を
出して貰つたが、そのうち Bertrand Russell: *Religion
and Science* と Aldous Huxley: *The Human Situa-
tion* には今も愛着を失つていない。これらの教科書版
について、私は印税なるものを殆んど貰つた記憶がな
い。教科書版とはそういうものなのだろうと思つてい
る。それは兎も角、教科書版とはいへ、私は各版のは
しがきには熱をこめた積りである。巻末の註も私なり

に念を入れた。学生達の日々の教室に係わる教材をおろそかにしたくない、という心情からである。

旅順の暮らしにも追々慣れてくると、戦跡めぐりをしてみようという気になった。お定まりのコースの最初は先づ東南端の東鷄冠山である。ここは旅順攻略戦最大の激戦地になった処だ。ロシア側が最も強固な要塞を築いていた地点で、二メートルに垂んとする、石混じりのコンクリート壁―ペトンと云った―が蜿蜒と続いている。この文字通り厚い壁に、乃木將軍麾下の兵隊は、三八式歩兵銃一丁という、徒手空拳に近い装備で、繰返し突撃させられたのだと云う。何度総攻撃をかけても城が落ちないのに、堪り兼ねた海軍側が、独自の斥候を上陸させて調査したところ、西北方の二〇三高地方面は殆んど無防備だということが判って、そちらを攻めるよう乃木に進言したところ、將軍は「それは武士道に反する」と、承認しなかったと云う。こういう將軍の配下になった兵隊こそ災難だったな、と思った。乃木は攻城戦の戦略を練る際「旅順へは二万も持って行けば済むだろう」と言ったと、何かの本で読んだことがあり、いくさの指揮をとる人間にとつては部下の兵隊は人間ではなく、モノになるのだなど

思わせられたものだが、終戦眞近自分が二等兵にされたとき、その記憶が甦って複雑な思いをしたことであつた。戦略がやつと変更されて、二〇三高地に攻撃の矛先が転じられた頃には、ロシア側も急遽その方面の守りを堅めるようになり、此処もまた激戦地となつて、耐え切れなくなった児玉源太郎大將が、奉天方面から急ぎ駆けつけて乃木の職権を一時取り上げ、東京湾防備の重砲を外して旅順に持ち込み、その威力で漸く旅順要塞攻略は片が付いたのだそうだ。旅順要塞の陥落は明治三十九年一月一日のことであつたと云う。

その後乃木將軍とロシアの司令官ステッセルが、旅順郊外の水師營という小村で会見し、互いの労を犒いて、美談として教えられたものであつた。第一次、第二次世界大戦を経過した今となつては、こうした戦争ロマンティズムは跡形もなく消し飛んでいる。

その後お客がある度に、私は戦跡巡りのガイド役を相勤めた。プロのガイドの口跡が乗り移つて、滔々と一席弁じたものである。

私の小春日和であつた。

やがて昭和十六年になつた。ここまでが私の旅順時

代の前期である。

(二九九九・二・五)